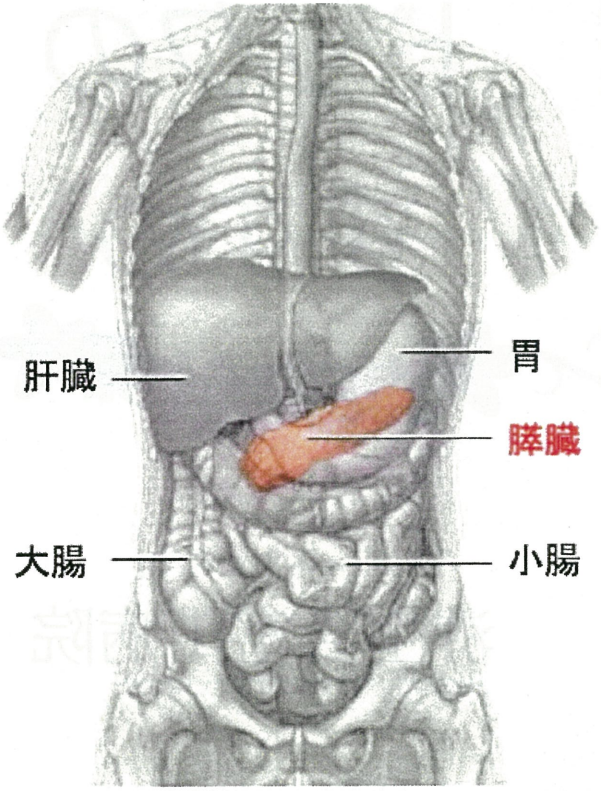
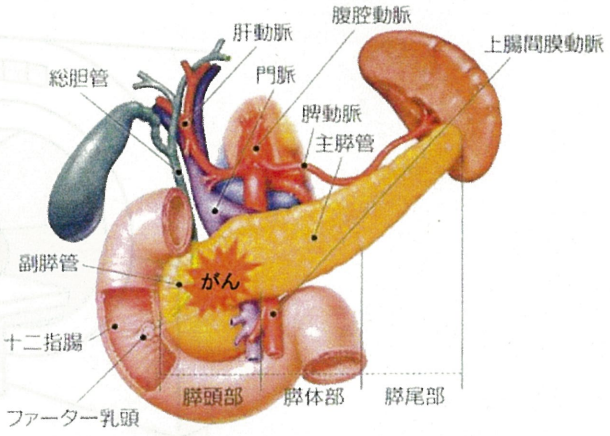
# 膵臓とは

膵臓はあまり知られていない臓器でお腹の中でも背中側にあります。主な働きは２つあり、１つは内分泌機能といって糖尿病に関係しているインスリンなどのホルモンを作って体のバランスを調節する働きで、もう１つは外分泌機能といって消化液の１つである膵液を作っています。膵液は肉や油を消化するための大変強い消化液で、膵臓は直接腸につながっておりこの膵液を腸に流して消化の働きを担っています。




# 膵癌とは

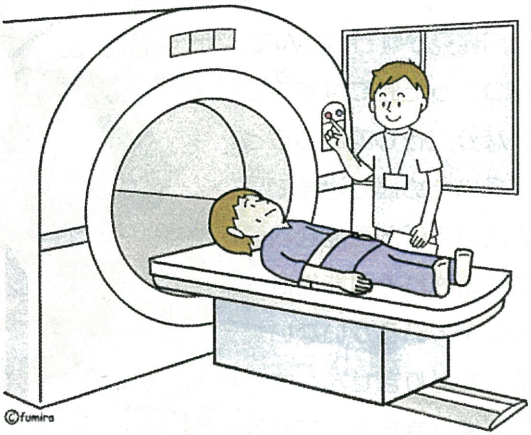
膵臓のがんにはいくつか種類がありますが、約 90%が通常型膵癌と言い、膵臓で作られる消化液の一種である膵液を流す細い管の内面を覆う上皮と言われる部分の細胞ががん化する浸潤性膵管癌という病気です。近年日本で増加している癌の一つでもあります。膵臓癌の大部分を占める通常型膵癌（以下、膵癌）は、近年増加傾向にあります。年間 28,000 人以上が膵癌で亡くなっておられ、癌死亡原因の第 5 位となっています。男性は女性と比較して 1.2～1.7 倍ではありますが膵癌になりやすく、年齢では 50 歳を過ぎた頃より膵癌になる方が増えます。その他膵癌の危険因子としては、膵癌の家族歴、喫煙、糖尿病、肥満等が挙げられています。膵癌でははっきりとした症状が出にくいこともあり、進行した状態で見つかる方が多いというのも膵癌の特徴です。局所にとどまり、手術が可能な状態で発見される割合は 15%程度と言われています。




早期発見が難しいがんで、見つかった時にはすでにかなり進行していることが多いため最も治療効果の高い手術が可能な状態で診断される可能性は３人に１人いるかいないかでしかありません。さらに手術できたとしても他のがんに比べ、例えば胃癌や大腸癌の切除後５年生存率（手術をして５年後に生存している人の割合%）が70%以上であるのに対して膵癌の場合には10%位ときわめて不良であり、極めて悪性度の高い病気です。

# ＣＴ検査による膵癌の早期発見

CT 検査は膵癌を発見するのに非常に有用な画像検査です。身体の断層写真（輪切りの写真）なので、胃の空気などの影響を受けることなく、膵臓をきれいに映し出すことができます。ただし、膵癌を疑って CT 検査をする場合には、造影剤を用いて検査をする必要があります。造影剤は病気を浮き上がらせるために使用する注射薬です。造影剤を使用しないで撮影した CT では、進行した大きな膵癌は診断することは可能ですが、早期の膵癌はもとより進行癌も時に診断できないことさえあります。そのためアレルギー、喘息、腎障害など造影剤が使用できない方を除いては、膵癌を疑った場合には造影 CT を撮ることをお薦めします。なお CT 検査は超音波検査や MRI 検査と異なり放射線被曝の問題があることを留意する必要があります。




ご予約・お問い合わせ

富山県済生会富山病院健康管理センター　電話　076-437-1133　（平日　14：00～17：00）